『家屋雑考』の流布と「寝殿造」の定着過程 THE DISSEMINATION OF KAOKU-ZAKKO AND EMBEDDEDNESS OF SHINDEN-ZUKURI

加藤 悠希*
Yuki KATO

This paper examines when and how *Kaoku-zakko* and the concept of “Shinden-zukuri” was disseminated.

In the early 19th century, the concept of the style of ancient noblemen's residences called “Shinden-zukuri” in *Kaoku-zakko* was shared by intellectuals. But the word “Shinden-zukuri” is not shared by them.

There are few manuscript of *Kaoku-zakko*. It is conceivable that *Kaoku-zakko* was not popular until around 1890. But *Kaoku-zakko* achieved recognition around that time, probably in editing *Kojiruien-Kyoshobu*, and was published in 1891. After that *Kaoku-zakko* was frequently referred, and “Shinden-zukuri” became widely used to mean the concept already known.

Keywords : *Kaoku-Zakko, Koji-ruien, Shinden-zukuri, National Scholars, Meiji Period*

家屋雑考, 古事類苑, 寝殿造, 国学者, 明治時代

はじめに

日本住宅史の研究史において、沢田名垂の『家屋雑考』（天保 13 年（1842）自序）は「寝殿造」「書院造」という用語・形式概念を提示したものとして重要な位置を与えられている。例えば太田博太郎は日本住宅史の概説は昭和 10 年頃まで『家屋雑考』の受け売りであった評しており¹⁾、近年「書院造」「寝殿造」の研究史を整理した川本重雄も『家屋雑考』に続いて田辺泰の『日本住宅史』（昭和 3 年（1928））を取り上げ、「こと寝殿造と書院造に関していえば、『家屋雑考』の記述を大きく踏み出すことはできなかった」と評する²⁾。

しかしながらこれまでの研究史の記述では、『家屋雑考』に示された「寝殿造」「書院造」という用語・形式概念がいかにして広く通説として定着するに至ったかという点については、全く顧みられてこなかった。そもそも「寝殿造」「書院造」という用語・形式概念が広く通説として定着したのはいつのことであったか。また、それらが定着する過程において『家屋雑考』はどのような役割を果たしたか。そして、近世・近代における公家・武家邸宅の沿革に関する多くの記述の中で『家屋雑考』はどのように位置付けられ、「寝殿造」「書院造」が定着する前後において公家・武家邸宅の沿革の記述はどのように変化したか。

これらの点について解明する端緒として、本稿ではまず「寝殿造」という用語・形式概念が定着する過程と『家屋雑考』の流布状況について検討を行い、「寝殿造」の定着において『家屋雑考』の果たし

た役割について明らかにしたい。

1. 『家屋雑考』の「寝殿造」像

論をはじめににあたって、まず『家屋雑考』³⁾における「寝殿造」の記述をみておこう。「家作沿革」の項において「寝殿造」は邸宅全体の形式として次のように説明される。

さてその寝殿造といふは、一家一構の内、中央に正殿あり。南面。其東西もしくは北に對屋といふものあり。正殿は主人常住のところ、對屋は家内眷属の居るところなり。さてまた正殿の前数十歩に、池を湛え、中島を築き、橋をかく。又東西の對屋より、南へ通ふ廊あり。其廊のはし、池に臨める所に、一屋を構へ、是を釣殿とし、又泉殿とす。東西廊の中程に、各小門あり。廊の内を切通しにして扉なし。是を両中門といふ。こはいはゆる回廊にて、東の渡殿、西の細殿などいふ是なり。其廊の回れる内をさして中庭といふ。その庭よりつゞきて、池島などあり。さてまた、件の廊の内には、家司。所従の役所々々ありて、今時の神社の回廊、或は寺院の東西寮などの如し。こはそのかみ、摂関大臣の御屋形をはじめ、四位、五位の家々とても、大抵右やうの屋造ならざるはなし。

また、「主殿」の項で「定式の寝殿造なれば、對屋、東西廊、中門、池島、釣殿などいふもの具足せざれば、旧制に叶はず。」と記されるのも、邸宅全体の形式に関する規定である。一方で、「寝殿造」の項

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo, M. Eng.

では、「寝殿の造り方は、大抵七間四面を常法とす。(中略) 丸柱、総板敷、屋上は檜皮葺にて、四方葺卸なり。是を四阿造といふ。」などというように、寝殿という建物一棟の形式が説明されている。すなわち、『家屋雑考』における「寝殿造」とは、殿舎配置など邸宅全体の形式から個別の建物の形式までを含んだ総合的な形式概念とみてよいであろう⁴⁾。

なお、「～造」という語は近世には建物等の形式としてしばしば用いられるものであり、「寝殿造」という語も、『家屋雑考』に先行して土肥経平の『春湊浪話』(安永4年(1775))に使われている例を見出せる。その記述は「又今の寺の方丈といふもの、多くは六間の寝殿作りなり。是昔の宮殿を寺へ施入有しもの多き故なり。それより其形によりて、後世も方丈を造れる故なるべし」⁵⁾ というものであり、この場合の「寝殿作り」は寝殿という建物一棟の形式くらいの意味であろう。井上充夫は『家屋雑考』の「寝殿造」について、「一家一構」の全体に関する言葉であって、単一の建物の形式や細部手法などの狭い範囲に関する叙述ではない点が、従来の「づくり」と異なっていると指摘する⁶⁾。管見の限りでもそのような意味で「寝殿造」という語を用いた例は『家屋雑考』以前には見つけられておらず、沢田名垂の創案による可能性が高いものとみられる⁷⁾。

2. 近世における形式概念の流布

ただし、『家屋雑考』の記述の多くは自序にも述べられるようにそれまでの有職故実研究等の成果に負ったものであり、『家屋雑考』において「寝殿造」と名付けられる形式概念は、『家屋雑考』のみにみられるわけではない。『家屋雑考』に前後する時期から、『家屋雑考』の「寝殿造」に類する形式概念の記述をいくつか挙げておこう(□は割注)。

●松岡行義『後松日記』⁸⁾ 卷之五(文政11年(1828)の記述か)
大内の諸院宮の制は、裏松固禪入道の撰び給へる大内裡図考証にて事たりぬべし。私第の様ぞしる人少なきこゝちすれば、はかなき心に思ひえたる事を、筆にまかせて書付、図をそふなり。親王達、上達部のすみ給ふ様、ひろさせばさのけちめはあるべけれど、その様は大概ひとつなるべし。めぐりは築地にて、門は東西にあり。[南面のしん殿の定めなり。] 中の正殿を寝殿といふ。(中略) 其寝殿は母屋五間、もしは七間、ひさは四面おのおの一間なり。(中略)
さて、この寝殿に対してつくる屋を対屋といふ。東のたい、西の対、北の対などなり。又いぬあうしとらにも作るべし。このたいに妻をも妾をもすましむ。よて妻を称して対の上、対の君などいふなり。対の制も寝殿にかはることなし。たいとしん殿には渡廊をつゞくるなる。
対より南行に廊あり。中門の廊といふ。廊の中に門あり。即中門なり。中門より南を釣殿の廊といふ。其最南に釣殿あり。こは池の魚つり、又暑をさくところなり。
中門の外南頭に車宿あり。こはみくるまを安んずるところなり。寝殿の階の東西の頭に紅梅、橘杯をうゆべし。(後略)

●喜多村信節『嬉遊笑覧』⁹⁾ 卷之一(文政13年(1830)自序)
凡家の式は南面に寝殿あり。対の屋ははなれて東西また北にもあり。^{キンドノ}廊ありて皆寝殿につゞけり。対の屋につゞきたる廊に車よせあり。並びて中門あり。また、釣殿ありて水に臨めり。そのめ

ぐり築地にて、中門の外のかたに大門を構ふ。侍処は中門の傍にあり。中門なき家にては、大かた此さまに廊にて、別屋にかよふやうに建たるもの也。

●作者不詳『土木考』¹⁰⁾ 上巻(幕末頃の成立か)

抑その上りたる世の造りざまと云は、まづ西東の門の内に各中門あり、其右ひだりに廊を造廻らして奥の中央の南おもてに寝殿あり、西ひむがし又は北に對屋をたてあひあひは橋渡殿をもて通ひとす、また小寝殿とて寝殿にさし並て建る事もあれど、是はいとやむごとなき際の事にて、おぼろげの家造にはなきことなるべし、水ある所ならば庭に池を穿て釣殿をたて中島に橋を渡す、但舎屋の構庭の置やうは人々の好みにしたがひまた所がらによりて広くも狭くも麗はしくも荒々しくもやさしくもいかめしくもこゝろこゝろに造るべけれど有べき限はかはることなし、又此外厩倉町などやうの所は便に随ひていかにも有べし

それぞれの影響関係などをここで明らかにすることはできないが、これらの記述の存在から、『家屋雑考』に示される「寝殿造」に類した古代の公家の邸宅に関する形式概念は、19世紀前半の段階である程度の広がりて共有されていたものとみてよいであろう¹¹⁾。

このような形式概念に関しては、『家屋雑考』に載せられる図版についても併せて検討しておく必要がある。『家屋雑考』には「寝殿造」の形式概念を示す図版が三点掲載されている(図1～3)。『家屋雑考』におけるそれぞれの注記を見ると、「寝殿全図」と題された図1については「こハ古画に見えたる大概を集め図する所なり、中門泉殿等の図ハおのおの其条下をみるべし」とあり¹²⁾、沢田名垂が作成したものとみられる。一方、図2・3(裏松固禪『院宮及私第図』における名称に従いそれぞれ「古図 両中門」「両中門図」とする)については、「こは古図のよしにて松岡辰方が許より贈りえさせつる所の略図なり、次に出すところ図も後に同家よりこひもとめて写せるものなり」とあり、前者は松岡辰方から、後者も松岡家から入手したものであるという。松岡家は辰方から、先に触れた『後松日記』の著者である行義とその子の明義まで三代にわたって有職故実家として活躍した家である。この二つの図については藤田勝也による研究があり、裏松固禪の『院宮及私第図』や『大内裏図考証 附絵図』(古代学協会本)に両図が掲載されること、また「両中門図」は17世紀後半と推定される住吉家粉本『屋簷拔書』にも載せられており、図の成立はそれ以前に遡る可能性があることが指摘されている¹³⁾。

これらの図の19世紀前半の流布状況について付け加えると、「両中門図」は源氏物語の注釈書である松岡行義『源氏類聚抄』¹⁴⁾ および斎藤彦磨『源語図集』¹⁵⁾ に載せられている。この二書は図版の順序や描かれる領域がほぼ一致しており、『源語図集』は『源氏類聚抄』から図版を抄出したものとみられるが¹⁶⁾、「両中門図」がこれらに載せられるのは、源氏物語の注釈においてこのような図が有効であったことを示すものといえよう。また、『源語図集』では図の脇に、「此図嬉遊笑覧一上六丁オノ説トヨクアヘリ」という朱筆による書込がみられる。この『嬉遊笑覧』一上の六丁表とはおそらく先に引用した箇所を指すものであろう。同様の朱筆による書込で他に「衛云…」や「衛居案…」などと記されることから、これは旧蔵者の山田衛居による書込とみられるが、図版と文章を通じて形式概念が定着していく様子を示す興味深い事例である。

また、後の記述ではあるが、関根正直は「殿舎図解」¹⁷⁾ (『国学院雑誌』、明治30~31年(1897~98))に「古図 両中門」を掲載するにあたって、図の来歴を次のように記す。

そもそも緒神家私邸の指図は、世にあるもの甚少し。左に掲ぐる寝殿の図は先師松岡明義翁より伝授せられしものにて、天保の頃師の祖父辰方翁の、裏松固禅入道光世卿が書きおかれたる図のうちの、一ひら撰みて門人たちに授け、物語ふみなどよまん人の、たよりをはかりたるものなり。

すなわち、この図は天保頃に松岡辰方が入手して物語などを読むときの補助として門人に与えたものであり、関根自身は辰方の孫である松岡明義から伝授されたという。松岡辰方に関する伝聞の真偽は断定できないものの、関根正直は明治15年(1882)に創設されたばかりの東京大学古典講習科に第1期生として入学しており、そのとき同科で故実の授業を担当していたのが松岡明義であったこと¹⁸⁾、また、後述する『古事類苑』の編纂に両者ともに参加していること¹⁹⁾などから、関根が松岡明義から図を伝授された可能性は十分に考えられる。

3. 明治期における「寝殿造」の定着

以上、「寝殿造」に類する形式概念は19世紀前半の段階において文章や図版の流布を通じてある程度の広がりをもって共有されていたことを指摘してきたが、一方で、その形式概念に「寝殿造」という用語を重ねた例は、管見の限りでは『家屋雑考』以外に見つけない。

この状況は、明治20年代半ばまで変わらない。この時期に住宅の沿革について記述を残すのは専ら国学系の学者であるが、例えば、黒川真頼の『工芸志料』巻四(明治11年(1878))²⁰⁾では

当時摺紳ノ建築ノ制ノ大略ヲイハシ、先門アリ、門ヲ入レバ車宿アリ、車ヨリ降りテ中門ニ入り南庭ヲ経テ更ニ北ニ向テ寝殿ニ昇ル、寝殿或ハ母也トイフ〔後世ニ至テハ於母也トイフ〕、寝殿ノ左右ニ屋アリ、是ヲ東ノ対屋・西ノ対屋トイフ、寝殿ノ北ニ屋アリ、是ヲ北ノ対屋トイフ、寝殿ト対屋トノ間ハ皆廊アリ、以テ往来ニ便ス、是普通ノ建築ナリ、此ノ制後世ニ至ルマデ改メズ、と記し、また、物集高見の『日本文明史略』巻之三(明治20年(1887))では、

此頃、貴族の屋造りは、〔古代は、屋造りも低くかりしが、此頃より、漸く、高くなれるとぞ。栄花物語〕大抵、南面に、寝殿ありて、対の屋は、〔女房などの、居るところ。〕離れて、東西、または、北にもあるが、廊をもて、寝殿に続いたり。対の屋の廊には、車寄せ、及び、中門ありて、中門の外の方に、大門あり、また、中門の傍らには、侍所といふもあり、また、寝殿の前面には、池を穿りて、釣殿などを、構へたるもあり。〔空穂物語、源氏物語、栄花物語〕さて、庭前に池を穿るは、古代よりのすさびにや、蘇我馬子が、家の庭上にも池ありて、池中に、小鳥を築きたりき。

〔日本紀〕

と記し、両者共にその形式概念を概ね共有するものの「寝殿造」という語は用いていない。『日本文明史略』の記述はその類似性からおそらく『嬉遊笑覧』を参照したものともみられる。『工芸志料』の直接的な典拠は確認できないものの、門から車宿、中門という動線による記述が、『家屋雑考』の引写ではないことは少なくとも確かである

図1 寝殿全図

図2 古図 両中門

図3 両中門図

図版出典：すべて「家屋雑考」(『新訂増補故実叢書』)

う。なお、この時期に住宅の沿革について記述したものとして、他に八木隆胤による「宮室沿革考」²¹⁾ (『学芸志林』、明治17年(1884))があるが、「寝殿造」に類する形式概念についての説明はない²²⁾。

一方、明治20年代半ば以降になると、「寝殿造」という語がこの形式概念を示す語として用いられるようになる。管見の限りで最も早いのは、明治25年の小中村義象「家作沿革」(『皇典講究所講演』)

74 号)²³⁾ および小中村清矩閣、関根正直・小中村義象編『日本史要』²⁴⁾ における次の記述である。

●小中村義象「家作沿革」

当時緞紳家の間に、専ら用いられしは、寝殿造といふものなり、そのさまは、周囲は築地或は板垣にし、東西に門を開く、入れば即車宿あり、夫より中門を経、南庭に出て、更に北に向ふて、寝殿に至る、寝殿は即正殿にして、主人の居る所、一家の中央にあり、南面なるを常とし、大抵七間四面なり、一丈を以て一間とし、柱を立つ、屋上は、檜皮葺にして、四方葺卸しなり、その七間四面の内、中間を階隠の間というふ、五間四面を本屋とし、その外一間通は廂なり、その外に簀子あり、簀子に高欄あり、この本屋を称して母屋或はオモヤなどといふ、母屋に簾をかけ、庇に格子あり、その四隅に妻戸あり、正殿の東西、若くは北に、対屋といふあり、その間、廊をかけて、往来に便にす、廊に渡殿、廻廊、橋廊等の名あり、正殿の前、数十歩に池を掘り、中嶋を築き、橋をかく、又東西の対屋より、南へかよふ廊あり、その廊の端、池に臨めるところに、一屋をかまへて、釣殿或は泉殿と称す、

●小中村清矩閣、関根正直・小中村義象編『日本史要』

家屋は、当時において、尤見るべきものは、寝殿造にして、貴顕の人の居住は、惣てこの式なり。

明治27～28年(1884～85)には、黒川真道が『好古叢誌』に「寝殿造考」²⁵⁾を掲載する。おそらくこれは「寝殿造」を論文のタイトルに掲げた嚆矢であろう。以後、湯本文彦他編『平安通志』巻之四十三²⁶⁾(明治28年(1895)刊)や、先に触れた関根正直の「殿舎図解」(『国学院雑誌』、明治30～31年(1897～98))など、「寝殿造」という用語は古代の公家邸宅の形式の説明としてほとんど決まっていられるようになる。

また、上述のうち『日本史要』を除いた「家作沿革」「寝殿造考」「平安通志」「殿舎図解」では、いずれも本文中で「沢田名垂」もしくは『家屋雑考』を参照している。『家屋雑考』を参照するものとしては、黒川真頼の「階隠日隠考」(『大八洲学会雑誌』47号、明治23年(1890)5月)が管見のうちでは最も早い。明治20年代半ば頃から『家屋雑考』が参照されるようになり、その結果として「寝殿造」という語が用いられるようになったものと考えられる²⁷⁾。ただし、小中村義象「家作沿革」の引用箇所の冒頭はおそらく『工芸志料』の記述に拠ったものであろうし、関根正直は先述のように松岡明義から伝授されたという図を参照して「右指図の如きを寝殿造りの構へといふ。」と記すなど、「寝殿造」と呼ばれた形式概念の内容自体は必ずしも『家屋雑考』のみが参照されたわけではないことは注意しておきたい。

また、この時期の記述として興味深いのは、国文学者の藤岡作太郎・平出鏗二郎による『日本風俗史』上編(東陽堂、明治28年(1885))の記述である。

諸臣の第宅も美観を競ふ、其制ひとしく漢土に学びたるものにして、これより四阿造りの建築大に行はれ、高貴の家屋はおしなべて此様式に倣ふに至り、皇朝古代の制こゝに於て一変せり。然らば四阿造りの建築とは如何に。

四阿造りは後世に宮殿作り、御所作り、または寝殿作りと称するものにして、唐令に宮殿皆四阿といへるものこれなり。

引用箇所に続いて記される形式の記述は、他の文献における「寝

殿造」の形式とはほぼ同様であるが、藤岡・平出は「寝殿造」ではなく「四阿造り」の語を採用している。すなわち、藤岡らが執筆した時点において「寝殿造」の語はまだ完全に定着していたわけではなく、別の語を採用する可能性が残されていたものと考えられる。しかし、坂本健一『日本風俗史』(博文館、明治33年(1900))のように「四阿造」の語を継承したものもあるとはいえ、結果としては「寝殿造」の語が定着するに至ったのである。

4. 『家屋雑考』の流布状況

前節では『家屋雑考』が参照されるようになるのが明治20年代半ば頃からであったと指摘したが、それでは、天保13年(1842)に成立した『家屋雑考』のその後の流布状況はどうであったか。

まず指摘すべきは、明治24年(1891)に『家屋雑考』が『百家説林』(校訂・編輯、今泉定介・畠山健)巻七に収められて初めて刊行されたことである。これは『家屋雑考』が参照されるようになった時期と概ね符合することから、黒川真頼のように刊行以前に『家屋雑考』を参照している例もあるものの、明治24年の刊行が『家屋雑考』の流布の一つの画期となったことは確かであろう。

次に、『家屋雑考』が刊行される前の写本での流布状況について検討しておこう。『家屋雑考』の写本はそれほど多くなく、確認できたものは以下の三本である。

●筑波大学附属図書館所蔵本、五巻五冊。

蔵書印:「東京師範学校図書印」(各巻巻頭)

東京師範学校(明治5年(1872)設立、同19年(1886)に東京高等師範学校となる)の所蔵となり、以後、東京高等師範学校・東京教育大学を経て、筑波大学へと組織の変遷に合せて引継がれたものとみられる。

●東京大学総合図書館所蔵本、五巻二冊(上下)。

奥書:「明治廿二年五月令書写し／小中村清矩」(巻五末尾)

蔵書印:「陽春廬記」「南葵文庫」「東京帝国大学図書印」(上下とも)

奥書から明治22年(1889)5月に小中村清矩が筆写させて小中村の蔵本となったものであることが知られる。小中村の蔵書はまとめて南葵文庫に納められ現在は東京大学総合図書館の所蔵となっており、これもその中の一冊である。

●東京国立博物館所蔵本、五巻一冊。

奥書:「明治十六年四月廿三日一校」(巻二末尾・朱筆)、「明治十六年四月廿六日一校 樋口光義」(巻五末尾)

蔵書印:「博物局工芸課」「帝国博物館美術部」「東京帝室博物館図書之印」「工芸課」

奥書・蔵書印より明治16年(1883)4月に樋口光義によって校訂がなされたもので、博物局工芸課(明治10年(1877)6月設置、同19年(1886)1月廃止²⁸⁾)の所蔵となって以後博物館に引継がれたものとみられる²⁹⁾。

すなわち、確認できる『家屋雑考』の写本の作成年代は、東京大学総合図書館所蔵本は明治22年(1889)、東京国立博物館所蔵本は明治16年(1883)以前であり、筑波大学附属図書館所蔵本は明治19年(1886)以前と推測される。

この他に、現存は確認できないが存在の知られる写本もある。まず、『百家説林』の底本となったのは大概如電の所蔵本である。また、

黒川家（春村・真頼・真道）の蔵書目録³⁰⁾に挙げられる『家屋雑考』は「五巻合冊」と注記されるので、刊本ではなく写本であろう。さらに、小中村清矩の日記『小中村翁日記』（国会図書館所蔵）には明治23年（1890）7月6日に「宮川大三来、官位考巻八清書持参。家屋雑考写頼。」、同月19日に「夕宮川来る。家屋雑考写出来持参。」とあり、先に挙げた明治22年作成の写本とは別に、このときにも家屋雑考の写本を作成させていることが知られる³¹⁾。ただし、この明治23年作成の写本が小中村の蔵書となったか否かは確認できない。

以上ですべての写本が網羅されたわけではおそらくないであろうし、重複して数えている可能性も考慮に入れる必要はある。とはいえ、小中村清矩・黒川真頼といった当時の有力な国学者にしても、刊行される数年前に『家屋雑考』を目にしていたことが確認できるとどまっております、明治24年に刊行される直前の時期まで、『家屋雑考』の写本による流布はかなり限られたものであったとみられる。

5. 『古事類苑』居処部の編纂と『家屋雑考』

一方で、『家屋雑考』は明治24年に「その後大正・昭和時代につぎつぎ編まれた近世随筆叢書類の先鞭」³²⁾と評される『百家説林』に収められて刊行された。それは、その時点において『家屋雑考』が刊行に値するものとして認められていたということであろう。この時期の国学者たちの動向のなかで、『家屋雑考』の価値を認識する契機となり得るものとして注目されるのは、彼らの多くが関与した『古事類苑』居処部の編纂である³³⁾。

『古事類苑』は西村茂樹の建議を受けて明治12年（1879）に文部省で編纂が開始され、以後、編纂事業は明治19年（1886）には東京学士会院、明治23年（1890）には皇典講究所、明治28年（1895）には神宮司庁へと移管され、神宮司庁ではそれまでの旧稿をもとに全面的に新稿が作成された。その後、明治40年（1907）に大体の編纂事業を終えて、編纂事務所を閉じ出版事務所を設置し、大正3年（1914）に出版を終えて出版事務所を閉鎖している。

『古事類苑』居処部が刊行されたのは明治45年（1912）のことであるが、そのなかには『家屋雑考』からの引用が多くみられる。断片的ながらその編纂経過をたどっておこう³⁴⁾。

文部省時代については、「明治十九年六月日古事類苑草稿取調」³⁵⁾の「解題未済之分二百六十八冊」のうちに「一、居処部 九冊」とあるのがその成果であろう。ただし、誰の手になるものかはわからない。

東京学士会院時代については、明治20～22年（1887～9）の成功目録があり³⁶⁾、明治21年に「居所門」8巻、明治22年には「居所門」2巻が編纂されたことが確認できる。明治21年中編纂の8巻の編纂者は関根正直、22年中編纂の2巻は黒川真頼である³⁷⁾。

皇典講究所時代については、『小中村翁日記』の明治23年（1890）7月2日に「皇典所より黒川真道居所部稿本回る」、同月5日に「黒川真道古事類苑居所部稿本取調」という記述がみられ、この時期に黒川真道が稿本を作成し小中村清矩が「取調」を行ったことがわかる³⁸⁾。なお、小中村が『家屋雑考』の写本の作成を宮川大三に依頼したのはこの「取調」の翌日である。それ以降居処部の編纂を示す資料は見つけられないが、明治24年（1891）4月に編纂方針が改正され、神祇部他15部門を第一期に完成させ、居処部を含む残りの25部門は第二期に完成させるように定められたことから、居処部の

編纂はあまり進められなかったものと推測される。

神宮司庁時代に関しては、「原稿受領簿」³⁹⁾によると居処部の原稿が明治37～38年（1904～5）に作成されている。その構成が明治45年（1912）に刊行された『古事類苑』居処部に概ね対応するので、刊本はこのときに作成された原稿をもとにしたものとみられる。原稿を作成したのは編修の三浦千畝・村尾節造・加藤才次郎であるが、そのときに旧稿がどの程度参照されたかは確認できない。

以上のような経過をみると、明治20年代初頭は居処部の編纂が盛んに行われていた時期であり、その時期に『家屋雑考』が参照されていれば、その価値を認識する契機になったであろう。実際に『家屋雑考』が参照されたか否かは、居処部の草稿のような直接的な史料を確認できないため周辺状況からの推測にとどまらざるを得ないが、明治12年（1879）の編纂開始以来『古事類苑』の編纂に関わり東京学士会院時代には編纂委員長を務めた小中村清矩が明治22年と23年に『家屋雑考』の写本を作成させており、明治22年に「居処門」を編纂した黒川真頼は明治23年の時点で『家屋雑考』を参照していることから、この編纂グループの内部においては、少なくとも明治22～3年頃には『家屋雑考』を参照することが可能な状態にあったとみてよいであろう。なお、『百家説林』の編集・校訂者の一人である今泉定介も東京学士会院時代には編纂員として関わっていた。これらのことを考え合わせるならば、『古事類苑』居処部の編纂過程において編纂グループ内でその有用性が認識されたことによって、『家屋雑考』は『百家説林』に収められて刊行されるに至ったのではないかと推測される。

6. 建築学における「寝殿造」の受容

ここまで、国学系の学者を中心に「寝殿造」という用語の定着過程と『家屋雑考』の流布について検討してきたが、次に明治20年代における建築学の側の「寝殿造」の受容についても検討しておくたい。

明治20年代は日本建築学の勃興期にあたり、住宅の沿革に関する記述は多くはない。木子清敬による明治23年（1890）の演説「日本宮殿建築の沿革」⁴⁰⁾は、「寝殿造」に類する形式概念については述べられないが、その内容はほぼ全面的に『工芸志料』に依拠したものである。また、明治24年（1891）4月から木子清敬の紹介によって『建築雑誌』に『土木考』上巻が掲載される。その冒頭で木子は「余是頃一書ヲ得テ閲覧スルニ、造家学ニ関係アル者ニ取りテ頗ル参考トモナルベシト思考シ、之ヲ寄送ス、幸ニ登録アラバ幸甚」と記す（句読点を補った）。すなわち、この時期には木子清敬によって国学の成果が建築学の側へと紹介されるのであるが⁴¹⁾、参照されたのは『工芸志料』や『土木考』であって、『家屋雑考』ではなかった。

明治20年代半ば以降になっても住宅の沿革に関する記述はあまり増えないが、「寝殿造」という語を用いる早い時期の例としては、明治26年（1893）に久留正道が講演「米国博覧会へ出品の鳳凰殿に就て」⁴²⁾において「さうして藤原氏は寝殿造り、寝殿造と云ふは七間四面に造り云々……古い巻物を調べても寝殿造の模様は分かりませんが早く言ふとまるで神社仏閣の様であって戸障子は一切建たない、」と語っているのが挙げられる。すなわち、建築学の側でも、国学者にほとんど遅れることなく、明治20年半ば以降「寝殿造」という語をその形式概念とともに受容したものと考えられる。その後も、

伊東忠太が執筆に加わった『稿本日本帝國美術略史』⁴³⁾ (農商務省、明治 34 年 (1901)) では「寢殿作りは当代に於て播紳の邸宅として用ゐられてある建築形式なり。」として「寢殿造」の形式概念が具体的に記述され、中村達太郎『日本建築辞彙』(丸善、明治 39 年 (1906)) にも「寢殿造」は項目として取り上げられる。昭和初期には前田松韻によって平安期の公家住宅の研究が始められ⁴⁴⁾、田辺泰によって初めての住宅史の通史『日本住宅史』がまとめられるが、その時までには「寢殿造」という用語・形式概念は既に大前提となっていたのである。

おわりに

最後に、本稿で指摘したことをまとめておきたい。

『家屋雑考』に記された「寢殿造」に類する形式概念は、「寢殿造」という語は用いられないものの、『家屋雑考』が著された 19 世紀前半にはある程度広く共有されていた。その状況は明治 20 年代半ばまで変わらなかったが、それ以降、『家屋雑考』が参照されるようになることで、既に共有されていた形式概念に「寢殿造」という用語が重ねられて定着していくことになる。

その画期をなすのは、明治 24 年 (1891) に『家屋雑考』が刊行されたことであり、刊行される以前の『家屋雑考』の写本による流布は限られたものであった。ただし、『古事類苑』を編纂していた国学者らは、明治 22~3 年 (1889~90) 頃には『家屋雑考』を目にしていたことが確認でき、彼らが『古事類苑』居処部の編纂を通じてその有用性を認めたことで、『家屋雑考』は刊行されるに至ったのではないかと推測される。

なお、本稿では触れていないが「書院造」という語が広く使用されるようになるのも、同様に明治 20 年代半ば以降のことである。ただし、それは「寢殿造」のように既に共有されていた形式概念に用語が重ねられたわけではなく、様々な試行錯誤を伴うものであった。そのことについては、稿を改めて考察を行うことにしたい。

注

- 注1) 太田博太郎『日本建築史序説』増補第二版 (彰国社、1989 年)、230 頁。
注2) 川本重雄「寢殿造と書院造 その研究史と新たな展開を目指して」(鈴木博之他編『シリーズ都市・建築・歴史 2 古代社会の崩壊』東京大学出版会、2005 年)、193 頁。
注3) 『新訂増補故実叢書』第 25 卷 (明治図書出版、1955 年) 所収。
注4) 前掲注 2、川本重雄「寢殿造と書院造」ではこの二つの差を挙げてその意味するものが「一貫していない」としつつ、「平安時代の貴族住宅の形式」を「寢殿造」と考えていたことは確かであると指摘する。なお、次節で挙げる松岡行義の『後松日記』の記述は、短いものであるが殿舎配置についても建物の形式についても言及されており、このように両者を合わせて一つの形式と考えることは、それほどおかしいことではないだろう。
注5) 『日本随筆大成』第 3 期第 5 卷 (吉川弘文館、1977 年) 所収。
注6) 井上充夫「「づくり」について」(『建築史研究』23 号、1956 年 2 月)。
注7) なお、後の例であるが、『古事類苑』居処部 (神宮司庁、明治 45 年 (1912)) の「家作一」総説には「家屋ノ構造ニ就テ一言スレバ、四阿ハ、アヅマヤト調ジ、其造方ハ、梁ヨリ四方ニ桷ヲ渡シ、四面貫釘ニシタルモノニシテ、其霽四注ス、後世ハ之ヲ寢殿造、或ハ御所造ナド称スレドモ」というように「寢殿造」を屋根の形式として用いる例も見られる。これは、『家屋雑考』「寢殿造」の項の、「梁より四方に桷(スミギ)といふ物を渡し、四方に貫き釘にして、樽風なきを四阿といふ。和名抄に、宮殿皆四阿。和名阿豆

萬夜とみえ、是を寢殿造の通法とす。故に此造りかたをさして、宮殿造とも、又御所造など、もいふなり。」という記述から派生したものであろう。『家屋雑考』では「寢殿造」の形式の特徴の一つとして屋根形式を説明するものと読めるが、『古事類苑』居処部では明らかに屋根形式として説明されている。この屋根形式としての「寢殿造」は『大言海』の「寢殿造」の項においても取り上げられている。

注8) 『日本随筆大成』第 3 期第 7 卷 (吉川弘文館、1995 年) 所収、131~132 頁。松岡行義については、加藤悠希「有職故実家松岡行義の邸宅に関する知識について」(『日本建築学会計画系論文集』631 号、2008 年 9 月)において論じた。行義が『後松日記』で「図をそふなり」という図は、おそらく「両中門図」や「古図 両中門」に類するものではないかと想像されるものの『後松日記』には載せられていない。後述のように行義の『源氏類聚抄』には「両中門図」が載せられるが (このことは前稿の時点で未確認であった)、『後松日記』執筆時に既に行義が図を入手していたかは不明である。

注9) 喜多村筠庭『嬉遊笑覧 (一)』(長谷川強他校訂、岩波文庫、2002 年)、34~35 頁。

注10) 国会図書館所蔵本 (中巻のみ一冊)、東京芸術大学図書館所蔵本 (三巻二冊) を参照した。成立時期については、文中に「寧ろより今の京になりてぞ」という表現がみられること、田中元勝 (1782~1849) の説を参照すること、国会図書館所蔵本に彦根藩校弘道館の蔵書印を有することなどから幕末頃のものだと判断した。なお、『彦根藩校 弘道館書籍目録 全』(安政元年 (1854) か) や『弘道館御書物目録』(弘化 4 年 (1847) から文久 2 年 (1862) の間か) には『土木考』は記載されていない (ともに『書誌書目シリーズ 70 彦根藩弘道館書籍目録』(ゆまに書房、2005 年) 所収。年代の推定は同書解説による)。

本文の構成 (巻頭目録の表記に従う) は、

- ・上巻: 総論/門牆部/殿舎部/舎屋用部/舎屋名所部
- ・中巻: 舎屋具部/舎屋調度部/庭部/雑部

で、下巻には絵巻の模写などの図版を載せる。このうち上巻は木子清敬の紹介文を掲げて『建築雑誌』に掲載された (52, 54, 55, 57, 62, 66, 75, 80 号、明治 24 年 (1891) 4 月~明治 26 年 (1893) 8 月)。

注11) なお、このような殿舎の配置に関する形式概念は一条兼良の『花鳥余情』(文明 4 年 (1472)) にみえる次のような記述にまで遡る可能性も考えられる。配置に関する形式概念がどこまで遡ることができるかは後述する配置図と併せて改めて検討する余地があるだろう。

正殿為中央而東西各有殿、謂之東対西対也、寢殿与対之間有透渡殿、不及対屋作之時東西構公卿座、子午ニ中門をつ、けたるをは対代といふなり、東西対代也、

(中略) 六条院には対屋二ありとみえたり

(伊井春樹編『源氏物語古注集成 第 1 卷 松永本花鳥余情』桜楓社、1978 年、214 頁)

注12) この注記は、『百家説林』再版本や『増訂故実叢書』以降の刊本では漏れている。

注13) 藤田勝也「古図 両中門」「両中門図」について 裏松固禪『院宮及私第図』に関する研究 4」(『日本建築学会計画系論文集』606 号、2006 年 8 月。のち、藤田勝也編『裏松固禪「院宮及私第図」の研究』(中央公論美術出版、2007 年) に再録)。

注14) 宮内庁書陵部所蔵。松岡行義による源氏物語の注釈書は他に『源語図抄』(弘化 4 年 (1847) 自序) と『源語問答』が確認できるが (いずれも宮内庁書陵部所蔵)、『源氏類聚抄』が最もまとまったものであり、「両中門図」を含むのはこれのみである。なお、松岡行義による源氏物語の注釈については、重松信弘『源氏物語研究叢書Ⅱ 増補新攷源氏物語研究史』(風間書房、1980 年) 389~392 頁も参照。重松は『源氏類聚抄』について『源語図抄』より後の成立であろうと推測している。

注15) 川越市立図書館所蔵。なお、『源語図集』の内容は、赤澤真理「『源語図集』の制作と受容—物語を通した 19 世紀における寢殿造観」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』、2007 年 8 月) に紹介されている。

注16) 特徴的なものとしては、藤原定家の一条京極邸の寝殿の東にある持仏堂を略す点や「兩中門図」の左脇に掛紙の内容を記す点など。前後関係については厳密には諸本の検討が必要であろうが、細部の正確さなどから『源氏類聚抄』が先と判断した。

注17) 関根正直「嚴舎図解」『国学院雑誌』3巻10～12、4巻1、3、明治30年8～11月、同31年1月。図は階の左右に植栽を描くなど細部に異同がみられる。

注18) 松岡明義の明治15年(1882)の授業は『禁秘抄』を講説し「内裏殿門ノ結構・位置、衣服、調度ノ如キハ言詞ノ能ク尽ス所ニアラサルヲ以テ、更ニ図画ヲ示シ或ハ物品ニ徴シ、以テ開悟スル所アラシム」(『東京大学第三年報(起明治十五年九月止同十六年十二月)』263～264頁。復刻版、東京大学史料研究会『史料叢書 東京大学史 東京大学年報』第2巻、293～294頁)というものであり、翌年には内裏式・雅亮装束抄・禁秘抄・公事根源・年中定例記を扱ったというので(『東京大学第四年報(起明治十六年九月止同十七年十二月)』。復刻版、同巻416頁)、関根が図を伝授されたのは古典講習科の授業を通してであったという可能性も考えられよう。

なお、古典講習科では関根の他にも小中村(池辺)義象・今泉(佐藤)定介(以上、第一期生)・黒川真道(第二期生)等、後で触れる明治期の国学者の多くが学んでいる。古典講習科の国学者については、藤田大誠「近代国学と高等教育機関 東京大学文学部附属古典講習科の設置と展開」(『近代国学の研究』弘文堂、2007年)等を参照。

注19) 少なくとも東京学士会院における編纂時期においては両者とも編纂事業に関わっていることが確認できる。

注20) 句読点を補った。なお、明治21年(1888)には増補訂正版が刊行されるが、本文の加筆・訂正は平等院鳳凰堂に関する記述など一部に限られており、引用箇所に関しては全く同文である。

注21) 八木隆胤「宮室沿革考」(『学芸志林』87,89冊、明治17年(1884)10,12月)。隆治という表記もあり『学芸志林』に多くの論考を発表しているが、人物については未詳。なお、「宮室沿革考」では『嬉遊笑覧』が多く参照されている。

注22) ここでは扱わないが、住宅の沿革に関連するものとしては他に、黒川真頼「穴居考」(明治12年)のように穴居のみを論ずるものや、関根正直「古代宮城の制」(明治22年)のように内裏のみを扱うものもある。

注23) 小中村義象「家作沿革」(『皇典講究所講演』74号、明治25年(1892)3月)41～43頁。小中村(池辺)義象は小中村清矩の養子となるが、のちに復姓する。

注24) 小中村清矩閣、関根正直・小中村義象編『日本史要』上(大倉書店、明治25年(1892))。

注25) 黒川真道「寝殿造考」(『好古叢誌』3編11-12、1894年12月、1895年1月)。黒川真道は真頼の子。「寝殿造考」は後に『考古学会雑誌』(1編6号、1897年)に再録される。日本建築学会編『近代日本建築学発達史』(丸善、1972年)の「建築史学史・年表」(稲垣栄三執筆)の明治30年(1897)の欄に「黒川真頼「寝殿造考」とあるのは真道の誤記で、『考古学会雑誌』に載せられたものを採ったものであろう。

注26) 小林丈広「『平安通志』の編纂と湯本文彦 十九世紀末京都における「知」の交錯」(明治維新史学会編『明治維新史研究7 明治維新と歴史意識』、吉川弘文館、2005年)によれば、『平安通志』巻之四十三(美術工芸志 建築)の編纂は、吉田秀穀起稿、湯本文彦・中野太郎初修、今泉雄作校閲、湯本文彦裁訂、という分担によってなされたという。大まかな分類でいえば、湯本は国学者、吉田は漢学者、今泉は美術史家である。中野については不明。

注27) なお、この「寝殿造」を示す図版として「寝殿全図」(図1)が載せられるようになるのもこの時期からである(黒川真道「寝殿造考」、藤岡・平出『日本風俗史』)。これも『家屋雑考』が参照されるようになった結果と位置づけられよう。

注28) 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』(東京国立博物館、1973年)。

注29) 山田孝雄『典籍説稿』(西東書房、1934年)によると、樋口光義は明治21年没で「帝室博物館の雇員」であったというので、樋口の校訂が博物局の事業として行われた可能性も考えられる(ただし「帝室博物館」は明治33年以降の名称)。なお、『博物館書目』(明治11年(1878))や『博物館書目解題略』(明治12年(1879))に『家屋雑考』の名はみえない。

注30) 柴田光彦編『日本書誌学大系86(1) 黒川蔵書目録—本文編』(青裳堂書店、2000年)。目録自体は大正6,7年のものまで含み、『百家説林』も含まれている。ただし、「階隠日隠考」が発表された明治23年の時点で黒川真頼が写本を所有していたかは不明であり、例えば博物局の所蔵本などを参照した可能性も考えられる。

注31) 『小中村翁日記』の記事は、大沼宜規氏のご教示による。後に触れる『古事類苑』稿本に関する箇所も同様。

注32) 『国史大辞典』(吉川弘文館、1979～1997年)、「百家説林」の項(水田紀久執筆)。

注33) 『古事類苑』の編纂過程については、『古事類苑編纂事歴』(大正3年(1914)3月31日付。『古事類苑 総目録・索引』(神宮司庁、1914年)所収)、『古事類苑月報』(吉川弘文館、1967～71年。不定期に「古事類苑編纂史話」など古事類苑の編纂に関する論考や史料が載せられる)、西川順土「神宮の編纂事業」(『近代の神宮』神宮文庫、1988年)、熊田淳美『三代編纂物 群書類従・古事類苑・国書総目録の出版史』(勉誠出版、2009年)などを参照。

注34) 編纂開始当初は40部門300巻で計画されていたが、最終的には30部門1000巻となった。40部門から30部門になった過程において、他の部門が居処部に組み入れられることはなかったので、居処部の扱う領域は編纂期間を通じて大きくは変わっていないものとみられる。

注35) 東京大学総合図書館所蔵『古事類苑草稿』(A00.6167)所収。

注36) 『日本学士院八十年史』本編(日本学士院、1962年)243～248頁。『古事類苑月報』30号(1969年9月)に再録。

注37) なお、当時編纂員であった松本愛重は後の談話で、皇典講究所に委託される前まで関根正直が「居所の部」を担当したと述べている(松本愛重談「古事類苑苦心談」『国学院雑誌』14巻5号、1908年5月。『古事類苑月報』7号(1967年10月)に再録)。

注38) 注31を参照。

注39) 神宮文庫所蔵。11門-4355。

注40) 木子清敬「日本宮殿建築の沿革」(『建築雑誌』48号、1890年12月)。もとは明治23年(1890)11月19日の演説。

注41) この点に関しては、稲葉信子『木子清敬と明治20年代の日本建築学に関する研究』(私家版、1990年)に指摘がある。

注42) 久留正道「米国博覧会へ出品の鳳凰殿に就て」(『工学会誌』142巻、1893年10月)。

注43) 編纂主任は当初岡倉天心、のちに福地復一が務め、黒川真頼・小杉梧邨ら国学者も編纂に関与している。なお、福地復一は「本邦居室装飾説」(『国華』81～84,88号、明治29年(1896)6～9月、同30年1月)において、「藤原氏の中葉に及びては、彩檻彫柱は、やかて素朴簡浄なる寝殿造となれり」(81号、632頁)というように、一度だけではあるが「寝殿造」の語を用いており、美術史の側にも「寝殿造」の語が浸透していたことが知られる。

注44) 前田松韻「寝殿造の考究」(『建築雑誌』491,492号、1927年)

(2009年7月10日原稿受理、2009年9月15日採用決定)